

神秘の大樹シリーズ I

消える時

神秘の大樹

偶然が

まえがき

世に言う「たまたま」という言葉、「偶然」という言葉、また、「偶然の一致」という現象は、はたして本当に単なる偶然なのでしょうか。

思い起こせば、あれは昭和六一年（一九八六年）当初のことでした。自分の意識改革に踏み切った私は、妻と一緒に日々苦行の連続でした。あれからすでに二五年の月日が過ぎようとしています。当初の二、三年ころから気づき始めていた、俗にいう、偶然の一致といわれる現象がしきりに身のまわりに発現し始めたのです。そして、記録し続けた体験記録は、今はゆうに三〇〇〇例にも達しています。

今回その中から選んだ例を二五話にまとめ、神秘の大樹シリーズ第一巻として、発行することになりました。以後、このシリーズを続けてまいります。

妻と二人三脚で波瀾万丈な世界を体験してきた私が得た結論は、この世には、「たまたま」とも「偶然」ともいう現象は、単に言葉上の話の便法として交わさ

れる風通しの良い言葉の世界であって、少なくとも私達にとっては、「偶然」の二文字はない、というものでした。

偶然の二文字が消えたその跡に何が残ったかといえば、それは「共振・共鳴・共時の世界」でありました。共に触れ合い、共にひびき合い、共に時を同じくするという、共時性現象（シンクロニシティ）こそが、俗に言う偶然の一致の姿であったのです。

この世を端的に表現するならば、それは「因果の世界」といえましよう。原因に添ったそれ相応の結果というものが、現代科学の基礎になっていると思うのです。しかし、それだけでは、共振・共鳴・共時の世界を説明することはできません。原因と結果を結ぶ因果の世界には必ずや、その中をとりもつ「縁結びの世界」が存在するからです。それは「縁エネルギー」の存在です。「縁エネルギー」とは「科学では証明しがたい、物申す魂の世界」なのです。

今で言う情報化社会の中心ともいえるプロバイダーの持つ接続の働きとよく似た「縁結びの主役」を担っているのが、肉体は死んでも魂は生きているというような「魂の世界」といえましよう。

原因が結果となるには必ず「縁結び」というプロバイダーが存在するはずで、縁の活躍があればこそ、原因―縁結び―結果を呼ぶことになり、因・縁・果というすつきりとしたいのちの流れとなります。肉体が死んでも生き活きと活躍する魂こそ縁結びの神といえましよう。

魂の世界は「霊界」、「無意識世界」「潜在意識」「深層意識」などなど表現はさまざまですが、私は一言で魂と呼んでいます。魂の世界は、人類発生から今日まで「今の心」をベースにして延々と形成されてきました。肉体を消した死の世界は、生きていた当時の心が積み重なって出来たものであればこそ「今の心」の尊いことが分かってきます。心は縁の力を持っていて、運命を支配する力も持っています。心は常にいのちの絶対調和力の統制下にあつて統御されている立場にあります。だから、縁はいのちの調和として存在し、人は、縁によって様々な人生劇場を繰り広げることになります。

神秘の大樹シリーズから、心と縁が運命転換の鍵を握っているということを示してもご理解していただけるなら幸いです。

神秘の大樹― 目次

まえがき	1
呼び寄せた北前船	6
スズメの贈り物	11
数霊は心のシグナル	17
いざなうコスモスの花	22
三重にひびく文字・数・色	26
天神様と文字と色のエネルギー	30
天地普遍の縁エネルギー	37
数霊は霊魂のシグナル	44
鮭の尾っぽと小説の主人公	51
文字・数・色は魂の暗証番号	67
絵皿のサギが飛んで来た	78
ハッピーが仏の水を飲む時―数字は宇宙の共通語か?	85
海鳴りは天のひびき	92
光町の鳥と銚子の鳥	102
無名酔人の「祝い酒」	110
出会いに咲いた縁の花	117
丹頂鶴と高橋園長	131
キタキツネのポントタ君	142
魂の生きかえる道	154
タイガー計算機に秘めた魂	165
合川町に生まれた名湯	180
魂は死なず―一三名児童のいのち	189
いのちは磁気・磁波・磁性体	207
千里ヶ浜で誕生祝い	217
待っていた兎太郎と松ノ木峠	227
あとがき	242

呼び寄せた北前船

昭和六三（一九八八）年は、日本が世界に誇る二大プロジェクトを成し遂げた年であった。国を挙げての祝賀ムードに包まれたのは、近代技術の粋を結集した土木工事である。

一つは、本州と北海道を結ぶ青函トンネルで、世界最長の（当時）海底鉄道トンネルは、全長五三・八五キロメートル。昭和三六（一九六一）年三月二三日に着工以来、苦節二七年の歳月をかけた。完成したのは三月二三日。

今一つは、本州と四国を結ぶ瀬戸大橋線（JR本四備讃線）全長三二キロメートル。開通したのは四月一〇日。

ともに、月を並べて完成されたのである。そして、月日は流れ、時代の流れは、過去を振り向かせない勢いで変遷してゆく。数日が過ぎ、さらに数日が過ぎてゆく。どんな出来事であっても、人びとの心の中に長くは留まらず、その新鮮さはいつしか薄れてゆ

く。そんな昭和六三年六月二五日のこと、ふと心をよぎった旅のいざない。

「海底トンネルで函館に行こうか！ JRの特安のEEきつぷがあるらしいぞ」
と私は妻に誘いをかけた。妻も旅好きであるから二つ返事で同調する。

気まぐれといえば気まぐれであり、たんに海底トンネルの、それも世界一長いという、それ以上の思いは何一つなかった。そうと決めたら話ほとんどん拍子で進み、特急列車を乗りつないでの出発の当日である。

青森駅へ近づくにつれ、どこからともなしに湧き上がるいのちの熱気。歓喜と好奇心、また、深い海底を止めどもなく続く長距離、一抹の不安さえも踊りだす。落ち着かない興奮と喜び、早く地上に飛び出してくれないかと祈りさえ渦巻く。一瞬、目の前が、光の海に輝いたとき、ああ、無事でよかったというひそかな思いさえ残る。

ただ海底を渡るだけの直感的な旅の流れで訪ねた函館駅。降り立ってからの予定は何一つある訳でもないから、折り返しの電車時間まで二〜三時間散策できる目ぼしいところを駅の案内で尋ねてみた。すると近くに資料館があるという。願ってもないことであった。箱館高田屋嘉兵衛資料館といい、北前船で名を馳せた淡路出身の廻船業者で、日本海は、酒田、松前の航路を開き、のちに、幕府の御用船頭になった人物とのことだ。こ



こに来て初めて、私を旅にいざなつた奥の何かが浮き上がってきた。

ただ青函トンネルの渡り初めというつもりだったのであるが、この資料館に入つてすぐ目に飛び込んできた、賑やかな幟のぼりに太く大きく書き込まれていた北前船のそれぞれの名前がずしつと胸を打った。一つの点であつた出発の動機が、次々と感動の「点」となつて連なり、この幟の名前を見ることで「一本の縁の線」となった。

ここは、私が暮らす酒田からは四〇〇〜五〇〇キロも遠く離れている地である。点から点へ、そして一本の線となる。実は、一点一点が、俗にいうところの偶然の一致という現象ととらえることがもつとも重要などころであつて、その一点一点の先には本命といえる不可視の真意があつた訳である。

北前船の幟七〜八本に書かれていた船の名前は次のようである。

「淳木丸」、「淳悦丸」、「淳繁丸」、「富繁丸」

ところで、私たち親子の名前は

私が「茂」、妻が「富美子」、長男が「淳」

なのである。どうみても船の名前と親子の名が激しく共振共鳴するし、文字一字に集約されつつ、それは、待っていたかのように時を同じくしたのであつた。いや、待ってい

たのである、と断定してもいいと思つている。それは、そろいもそろつて、

茂Ⅱ繁、富、淳

というひびきで待っていたといつていい。

ちなみに、淳木丸の呼び名は「浮き丸」というそうだ。沈まない船という、いかにも、海の男の祈りに充ちた、心打つ言葉である。

ここを出るとき、記念の記帳ノートに、酒田市と書き込んだ。それを、じいつと目で追っていた女子職員が

「あら！ 私酒田の孫です」

と言ひ出した。その言葉がこの身を突き抜けた。ここ函館に来ては、女子も私たちも同郷といつてもいい。実に身近に思う一瞬の命の火花である。

この同郷の話はこの後、青森駅に降り立ってか

スズメの贈り物

それは、昭和六二（一九八七）年の秋のことだった。妻は、日枝神社に参拝の帰り道、怪我のためなのかどうか、飛ぶことも、動くことさえもままならない一羽のスズメと出会った。両の手のひらの中に包むようにして持ち帰り、

「お父さん…供養してやって下さい」

と、哀れみの声で言いながら私に渡した。スズメはすでに息遣いもなく、その温もりはしだいに消えて、いのちは絶えてしまった。

どうしたらいいものか…と考え、庭の柿の木の下に埋葬することにした。五〇センチほどの穴を掘り、底には、スズメの大好きな稲穂を敷布団にして休ませることにした。にわか坊主となり、般若心経を唱え、天地自然の中に還るようにと祈った。

そんなことのある年の暮れ、例年にも増して、柿は豊かに実り、爺さんがその柿を

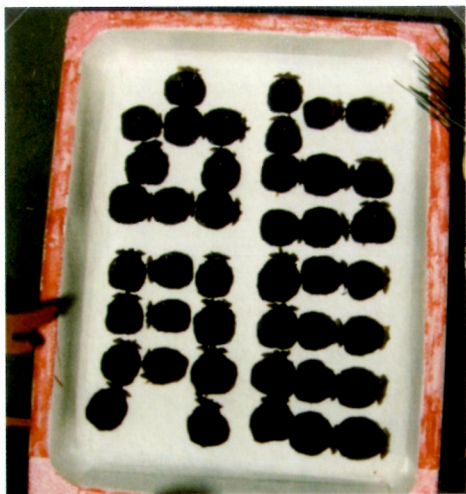


ら再び開花することになった。その日、酒田に戻る電車はないのでこの地に一泊することにして駅員に泊まる宿を尋ねてみた。それがまた

「私も酒田の孫です」

と、先ほどの資料館の女子と同じことを言う。両親が、本町生まれであるというから、こちらとは目と鼻の先なのである。

一度は耳にしたことのある言葉に「世間は狭い」という言葉があるが、この世の縁の糸は、見事に交叉混合して、繋がりがあっていることが次第にわかってくる。



干し柿に加工してくれた。黒々と立派な干し柿となり、その干し柿を見たとき、次の年の干支を思い出した。「来年は辰年であるから、干し柿で龍の文字を描いて祝うことにしよう」と考え、発泡スチロールの箱の蓋に干し柿を一個一個並べて龍の文字を描いてみると、干し柿の数は四二個であった。四二を逆さに読めば二四となるから、それを音で読んでみれば「不死」とひびくではないか…。

四二↓二四⇨ふし⇨不死

柿の木の下に穴を掘って稲穂の布団に休めたスズメは、柿の身に同化して、爺さんの手を借りて、太陽と風のいのちに守られながら干し柿になった。干し柿はさらに新年の十二支である辰⇨龍となつて新年を祝う。

思えば、一つの出来事には、このような一連の流れがひびきあつていふと思えてならないし、奇しくも、床の間の干し柿の龍を撮影してみると壁には上り龍の姿が映つていふではないか…。これを見たとき、これはきつとスズメの「吉祥の舞」にちがいないと直感した。

昭和六三（一九八八）年の新年は、スズメの吉祥の舞で明けることになり、さらに、この年の秋になつてから再びスズメの結ぶ吉祥の舞が出現することになった。

一〇月一日、午前三時三五分頃、私は、軽い霊視感でハッとした。俗にいう、霊言（内なる声）とか、霊視とかいわれるものではないのか。それは、「二二、八八〇円」という内なる声、さらに「傷」という文字を砂上に書いている自分。その姿を見ている自分…。これらのことは、一見意味不明で何ともいいがたいが私にはピンとくるものがあった。二二、八八〇円を言い替えてみると「ニイハチャエン」（円⇨縁）となる。

さらに、この言葉を「新しい蜂や（幼い蜂）」と解釈してみた。つぎに「傷という砂上の文字」のことも、連続性の中でピンときた。それは「傷ついた新しい蜂（幼い蜂）」というメッセージではないかと意味付けをしてみることができる。

さて、その日の昼時のことである。玄関先に出てみると、一匹の大きな体の蜂が砂の上を歩いている。この地は、深い深い砂壤土の地盤になっている。蜂は、色も新鮮で瑞々しさいっぱいで、それも、飛ばずに歩いている。まだ幼いスズメ蜂とすぐにわかつ



砂上に傷の文字のこと…

昭和六二年のスズメの埋葬と稲穂のこと…

うだ。
昭和六二年のスズメの埋葬と稲穂のこと…
砂上に傷の文字のこと…

ていたが、蜂はびたりと停止して身動き一つしなくなった。どうしたことかと前を見ると、蜂の前には、見事に網状になった、真っ赤な太陽そっくりのホオズキが立っていた。静まり返った柿の木の下の方オズキの太陽は、奇しくも、昨年の秋、スズメを埋葬してあったその場所であったのだ。どうも、この話の意志性がしだいに浮き上がってきたようだ。

スズメとスズメ蜂のこと…
ホオズキの太陽のこと…

これらの連続性の出来事に思いを寄せていたこの時、私は、自分が自分でない不思議な感覚に立っていた。

ふっと我に返り、足元にじいっとしているスズメ蜂を木片に乗せると、手にしていた爪楊枝のブドウ飴をそっと口元に持ってゆき指を放した。その後



たが、近づいても逃げようもしない。しばらく観察していて、あれ、この蜂は左羽を「傷めている」ではないか。これでは、鳥に見つかればひとたまりもないし、また蟻にでも攻撃されればなすすべもなく命を落とすことになる。それでなくても、自力でエサなどとても捕れやしない。私は、硝子コップを持ち出して、その中に入れて家の中に持ち込んだ。

早朝の霊言霊視のことが気になって放置することができなかった。『砂上の傷ついた幼い蜂』の予告は的中したことになる。今は、何よりもスズメ蜂を元気づけて外に放すことを考えた。

まずエサを与えなくてはならない。蜂蜜ならきつと喜ぶにちがいない。そこで思い出したのが、今年の九月二十九日、知人の入院先でいただいたブドウ飴のことである。そのぶどう飴を爪楊枝にたぐって外に出た。そして、柿の木の下で蜂を放したが飛び立てない。左の羽が縮んだままで、それを引きずるようにして静かに歩きだした。じいっと見

かれはとっさに食いついた。前足で爪楊枝の棒を必死に押さえ込みながら息もつかずに呑み込んでゆく。あつというまにブドウ飴の玉は小さくなっていった。

この情景を見ていた私に新鮮な生命感の火がついた。

「食こそいのちなのだ！」

ということをして。生命のスタートラインは、蜂もわれわれも「食うこと」で一線に並んでいる。「いのち」なのだと思ったとき、なぜかこの世は、明るくなるではないか。

スズメ蜂の食事に邪魔立てせず私は家にもどり、一度寝る前に柿の木の下に行つてみたが、スズメ蜂はどこにも見当たらず、そこには、彼の温もりを残すかのように、一本の爪楊枝が残されてあつた。

スズメ君！ スズメ蜂君！ ホオズキの太陽ありがとう。

数霊は心のシグナル

現代医学の治療には、物理的療法や、カウンセリング（精神医学）など包括的に、また、広範囲な面からその治療体制は整えられている。だがそれでもなお、いのちの本質的な世界、奥深い意志性の発現には届かぬことが多いだろう。また、そこまで進展させなくてもいいのかもしれない。

奥深い意志性、すなわち、潜在されて表にはなかなか浮上してこない心の世界には、通常、係わる問題ではないが、現実には長期にわたり意識が戻らぬという病人は決して少なくもない。しかし、意識不明であつても、奥深い魂の世界は、生き生きと輝いているのは事実だ。

我々のいのちの中身は、すべて物申す霊体であるし、自分などという存在は、何といつても「今」しかない訳で、今という時間刻みは、一刻も停止することはできない。心臓

の不眠不休と同じで、今を停止することは不可能だ。「人生は時間刻みの回り舞台だ」そして、過ぎし思いは魂（心Ⅱ意識）となつて、心の倉庫に倉積みされてゆく。

いわば、その心の倉の入り口に立っているのが、今の自分と考えればいい。ところが、心の倉の入り口には扉は無く、いつも開かれているから、入り口に立っている今という自分は、つねに心の倉の「光と闇の風」に吹きさらされていることになる。その魂の圧力下におかれている今の自分は、いわば、自分であつて自分に非ず、万物普遍に通じる心の倉の番人のようなものだ。

だから、無意識下にある病人たちは、いわば「心の倉の番人役不在」（自己不在）ということもできる。扉のない心の倉から湧き上がる魂の交通整理もままならず、自由に魂が出入りすることができると世界を思うとき、無意識下にある病人たちの心の倉と心の結びをするには、こちらもまた、無の世界に立つてその通じ合いをしなくてはならない。時に、当時の妻は心の倉（魂）にその心結びができる境地にあつた。これも一つの縁で、遠距離にあつた知人の入院先へ望まれるままに何度か見舞いに出かけていた。

昭和六三（一九八八）年一〇月二二日のこと、先方の奥様から、入院中の夫の様子がおかしいという連絡が入つた。もちろん主治医の指示によって治療は続けているものの、

なにしろ、病の夫は、すでに、二七年間にわたり寝たきりという難病であり、家族の思いを伝えることは不可能に近く、ひたすら看病一筋の難行苦行の道りであつた。奥様の言うには、「シャツクリが止まらない」「熱が三九度もある」「さらに痙攣が続いている」といった、普段にはみられない症状なので心配でならないから会つてみて下さいという。夫は、何かを伝えたかつたのかもしれない。翌一〇月二二日に駆けつけてみた。酒田市からは、所要二時間近い道のある町の総合病院である。

昨日までは、二人部屋の二〇二号室だつたが、今日からは二階の「一六号室」（二一六号室）に移つたという。病状の重篤から一人部屋に移つたのかもしれない。

病室に入った妻は、彼の耳元で、語りかけるように一言一言、静かにあいさつの話しかけをしていた。彼の表情からは、微かな反応を感じられた。顔はいくぶん腫れ気味で、肌は透き通つていた。仏教でいう浄土の世界感とはこうした秀囲気なのかもしれない。奥深く輝きつづける魂のひびきは、まさしく、時を超え、空間を超えた、時空の干渉を受けない自在無碍の世界であろうか。

しばし、時の流れを過ごして病室を出たのは夕刻のこと、帰路は心にもなく、車のスピードをあげて走り続けること四、五〇分の頃、晩秋の日暮れは早く、ライトを照らし、

型車		普通車		二輪車		原付車		5日		裏面記載のとおり	
貨特	大型	貨三	軽軽	自軽	二種	小一	型種	午前		9時	
物貨	特特	物輪	乗貨	二二	原原	型種	特原	午後		時	
車両		番号		庄内5513		4285		免許証		管無	
3年		10月		22日		午前		4時		52分ごろ	
最上郡		丹形町		丹形		574-9		付近		道路	
<input type="checkbox"/>		法定速度違反		<input checked="" type="checkbox"/>		指定速度違反		16 km/h		超過 40 km/hの56 km/h	
22・1・118・1(2)		令11()		22・1・4・1		118・1(2)		令1の2			
<input type="checkbox"/>		信号機信号		<input type="checkbox"/>		赤色		<input type="checkbox"/>		黄色	
7・4・1		119・1(1の2)		令2・1							
<input type="checkbox"/>		指定場所一時不停止		<input type="checkbox"/>		交差道路通行車両等の進行妨害					
43・4・1		119・1(2)		令1の2		43・119・1(2)					
<input type="checkbox"/>		右側通行		17・N		119・1(2の2)					

ある町外れにさしかかった時、前方で半円に振られる赤い灯にハッとした。「取締だ」と気づきメーターに目をやったら針は六〇キロ位になっていた。停止すると首をかがめた警察官が

「速度違反です」

と、宣告してきた。ここは四〇キロ制限で、五六キロで走行していたという。「二六」キロオーバーになっていたのである。反則切符を切られているとき、そばにいた妻が

「お父さん、病院の部屋は何号室でした？」と聞いてきた。

「あれは二階の一六号室だったよ」

と言ってから、私は全身から昇り上がってくる霊気を感じた。一六キロオーバーと二階の「一六号室」(二一六号室)との共振共鳴なのだ。

この時、私は、魂は奥深くで生き生きと輝いているのだと実感した。たとえ意識がなくとも、この現実の自分という霊体の中に同化して何かを語りかけている。すなわち、魂は生きているということなのだ。

この世全てが、たまたまの偶然の流れだという、一過性の現象は何一つないであろうと実感させられた。

一六号室の病室名で、自分の魂(霊体=心)を数字(数霊)で象徴化する。そして、「わたしだよ」、また、「ありがとう」とか、そういう何らかのメッセージを発信させて、魂不滅を感じてもらおう。

数字のひびきに魂を乗せて、天地自在に「思えば通わすいのち綱」となって働き続けている意識の世界。

数字を媒体にして、数字をシグナルにして、語りかけている無意識の世界。

数のひびきで、生き生き輝き、語りかけているのである。